

小沢昭一 「元祖・蒲田行進曲」

岡 茂光

お生まれが蒲田行進曲誕生と同年の一九二九年、自らを「元祖・蒲田行進曲」と名乗って憚らぬ小沢昭一さん。しかしながら先輩は長年続く「蒲田モダン研究会」の対象となつたことは一度もないのはどういうわけだろうか？

小沢さんは良くこう仰っていた。「今の自分があるのは蒲田と麻布のお蔭です。蒲田の空気が、麻布の仲間が僕を育ててくれました」。四歳（一九三三年）で引越されたころの蒲田は田園の色彩が残るなか、「松竹キネマ蒲田撮影所」をはじめ「黒澤工場村」「大倉陶園」「高砂香料」等の西欧の先進技術を越えようとした企業の進出で、町はモダンで文化の香りに満ちていた。もともと感受性豊かで、おませな先輩は年齢に相応しい野山の遊びをする一方で「御園座」の演芸、「女塚神社」境内でたびたび行われていた撮影ロケを見物するうちに大人の仲間入りを一足早くされていたに相違ない。

更に麻布学園での「奇跡の遭遇」が小沢さんの多芸多才な面を際立たせていくことになったと思われる。何しろ、お仲間がフランキー・堺、加藤武、仲谷昇、内藤法美、大

西信行等々、日本の音楽、映画、舞台で羽ばたいていった人たちのだから。麻布で仲間と始めた演芸大会、今ではどの学校も盛んな文化祭の事始めと先輩は言っておられた。高校生のお芝居が当時の「アサヒグラフ」に大きく取り上げられたのだから、さぞかし本格的なものであったことが容易に想像される。

映画演劇、話芸、エッセイスト、俳句、様々な分野で活躍された先輩が次に取り組んだのが日本の伝統大道芸の研究と保存。「猿まわし」「蝦蟇の油売り」「ろくろつ首」「へび娘」等、昭和の初期まで縁日で良く見られた大道芸。忘れ去られようとしている路端の芸を日本全国自らの足で極めたエネルギーには驚嘆するほかありません。先輩が唯一カメラを許さなかったのが「やなぎ句会」。メンバーの桂米朝、柳家小三治、加藤武、永六輔、黒柳徹子等のお友達と共に俳句を着に滅多に見せぬ素顔を出していたのではないのでしょうか。

小沢昭一さんは蒲田が誇る人的文化遺産、今後の「蒲田モダン研究会」の研究課題との声がチラホラ聞こえてくる。きつと天国の小沢先輩は悪戯っぽい笑みを浮かべて呟いていることでしょう。「分かってたまるかー、小沢昭一の小沢昭一的本当のこころを」。